

今回は、思川流域の古墳群を探訪します。思川流域の古墳群とは、下野市国分寺地区周辺に^{れんめん}連綿と続く古墳時代後期の古墳群の名称です。南側は、小山市に所在する^{まりしてんづか}摩利支天塚古墳・^{びわづか}琵琶塚古墳と北側は、栃木市と壬生町の境に所在する^{あづま}吾妻古墳までが含まれます。

古墳時代は大きく、前（約1600年前）・中（約1500年前）・後（約1400年前）期の3期に分けられます。

思川流域の古墳群が造られる前までの県内の大型古墳築造の流れをみると、古墳時代前期には、各河川流域に前方後方墳という平面形が前方部だけでなく後ろの部分も方形の古墳が造られました。下野市内には、田川流域に^{せんぼうこうほうふん}三王山南塚1・2号墳（前方後方墳）が築造されました。古墳時代中期になると、こうした大型の前方後方墳が造られなくなり、突如として田川流域の宇都宮市^{ささづか}笹塚に大型の^{ささづか}笹塚古墳が築造されます。この古墳は、前期の前方後方墳ではなく^{せんぼうこうえんふん}前方後円墳という形状になります。この頃になると、畿内の大王との関わり方の変化からか、大型の古墳は前方後方墳ではなく、前方後円墳に変わります。笹塚古墳が築造されてから約100年間は、田川流域の宇都宮市南東部が大型古墳の築造される中心地区になります。

その後、後期頃になると宇都宮南東部に築造された大型の古墳群が国分寺周辺の地域に築造されるようになります。

この地域は、前段階の桑57号墳（小山市）を除けば前勢力の基盤のうすい地域で、国分寺地区に接した思川と姿川の合流地点北方、現在の小山市飯塚地内に突如として全長117mの前方後円墳である^{かりしてんづか}摩利支天塚古墳が築造されました。その後、^{かぶとづか}琵琶塚古墳（墳丘長123m 県下最大規模）^{あづま}吾妻古墳 ^{かぶとづか}甲塚古墳 ^{こくぶんじあたごづか}国分寺愛宕塚古墳 ^{さんのうづか}山王塚古墳 ^{まるづか}丸塚古墳の順番に大型の古墳が築造されていきます。摩利支天塚古墳が5世紀末から6世紀初頭、琵琶塚古墳が6世紀の前半頃に位置づけられ、墳丘の大きさなどから、この2つの古墳がこの時期の王墓であったことが考えられます。

摩利支天塚古墳が造られた頃、近隣の群馬県や埼玉県でも同じような地域再編の動きが進んでいました。群馬県では、高崎市にある^{ほとだ}保渡田古墳群が、埼玉県も^{いなりやま}行田市の^{さきたま}稻荷山古墳に代表される埼玉古墳群が形成され、いずれの古墳群でも首長の系譜がとぎれることなく順次形成されていきました。

これらの古墳は、規模が120m前後の最大級の古墳で、周辺には同様の大型の古墳が数世代にわたって築かれており、以後の勢力基盤を確固たるものにしていきます。まさに国造（くにのみやつこ）の墓にふさわしい規模の古墳です。国造とは、畿内の大王から地方の支配をまかされ、それぞれの地域をおさめる地方官（役人）ですが、各地の首長たちも、6世紀の前半頃までには、大王の政府の地方官僚である国造へと変質していったと考えられます。

こうしたことは、埼玉県の^{しんがい}稻荷山古墳から出土した「辛亥」銘鉄剣（471年製作）によって知ることができます。要点を記すと「ヲワケの臣がワカタケル大王（倭王武 = 雄略天皇）のとき、大王のそばにつかえる親衛隊長として、大王が天下をおさめるのを助けた」という趣旨のことが書かれています。地方の有力首長としての国造の立場は、記録はありませんが^{しもつけの}下毛野（ ）でも同じであったと考えられます。これら国分寺周辺に築かれた古墳の被葬者達も大王を守る親衛隊長などで宮に仕えていたと思われます。

^{しもつけの}下毛野・・・古く^{けのくに}栃木県と^{しもつけの}群馬県は毛野国とよばれていたが、伝承によると^{にんとく}仁徳天皇の時（5世紀前半頃在位）に^{かみつけの}群馬県は上毛野と^{しもつけの}栃木県は下毛野に分国したといわれている。